
Muv-Luv ALTERNATIVE ～武闘家は往く～ (永久凍結)

アルベルト(療養中)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v A L T E R N A T I V E 　武闘家は往く　
（永久凍結）

【Nコード】

N 6 1 4 9 T

【作者名】

アルベルト（療養中）

【あらすじ】

幼い頃より武闘家として修行に明け暮れた1人の青年が死んだ。彼は神と名乗る老人と出会い、転生を果たし、地獄のような世界で闘うことを決意した。

*感想とアドバイス、ガンガン待ってます。

しばらくの間、この小説は永久凍結させていただきます。誠に勝手

ながら申し訳ありません。

序章

人は死ねば「無」になる。

その人間の生きている間の行いが例え「善」であろうが「悪」であろうが、根源は同じ。死ねば最後は皆同じ場所に集まる、そう俺は考えている。

本来ならばこの俺もまた、そうして「無」になるはずだったんだろうかと疑問に尽きないものなのだが……今の自分の置かれている状況では理解しようもないというのが本音だった。

何も無い。そう、本当に何も無い場所だ。

見渡す限りただ真っ白な空間。全てが白すぎて平衡感覚は可笑しくなって発狂しそうになる、それほど真っ白だった。

「…………ふう」

一息吐いて気持ちを落ち着かせ、その場で正座する。

落ち着こう、落ち着いて、整理するんだ。

俺の名前は凱宗^{かいしゅう} 土門^{どもん}。八歳の時に両親を亡くし、武闘家であった友人に弟子という形で引き取られ、異国の地での修行に明け暮れる。

以来十年。一度も日本に帰ることなく鍛練を重ね、歳月を費やし、一年前に印可（卒業証書）を与えられてようやく一人前の武闘家として認められ一人修行に入る前に両親の墓参りと報告のために久々に日本へ戻った際、道路に飛び出した少女を助けた代わりに死んだ…………と。

思い返してみれば、我ながら壮絶で呆気ない人生であったと言える。

「とまあ整理出来たわけだが状況が変わったわけではない」

そう言葉が半分出かけていたのだが、喉にグツと押し込めたために出す事は出来なかった。

『すまん！儂が悪かった！この通りだ！』

何て事は無い、俺の目の前に何時の間にか居たお爺さんが土下座しているという変化があったからだ。

「とりあえず頭を上げてくれませんか？」

そう言うとお爺さんは顔を上げてくれる。

「まず、お爺さんは誰ですか？もしかして俺と同じで死んだんですか？」

『いや、儂は簡単に言うならば神様という存在じゃ』

うん、このお爺さんが神様っていうのは何となく確証が持てる。だってお爺さんから後光が差してるし。

「へえ、神様……それで？神様がどうして俺に謝るんですか？」

『（冷静なんじゃの……）「武闘家ですので」心を読まれたじやと！?』

「……まあ、話を続けて下さい」

『う、うむ。実はな、本来ならばお主は死ぬ運命ではなかったのじや』

死ぬ運命ではなかった？とすると……

「自分のこの死は定められたものではなかったと？それは何かの手違いかなんですか？」

『そうじゃ。お主とは別の人間が死ぬはずだったのだが何故かは分からんがお主が死んでしまった。だから本当にスマンかったあああああ！』

そう言つてまた土下座する神様。

「そんな…別に怒つてないですよ」

『このとおりじゃ！本当に……ぬ？』

神様が顔を上げる、何とも間抜けな顔だと思つてしまった。

「別に怒つてないと言つたんです。人はいつしか死にます、それが早かったか遅かったかの違いなんですよ。それに命を救うため死んだのなら本望です」

『そうか……ところでお主、生き返られるのならば生き返りたいか？』

「そりゃあ、まあ……」

生き返られるなら生き返りたい。

少女を助けられたことはそれでいいとしても、俺は曲りなりにも武闘家だ。最後の最後まで武闘家でありたい、これが俺の本音だ。

『そうかそうか——それが地獄の世界でもか？』

「!？」

俺の顔は強張ったと思う。突然変わった神様の口調と声色に、武闘家として鍛えられた感性が反応したのだ。

「どうゆうこと……ですか？」

先ほどの雰囲気とは一転、おそらく神様から発せられているのである。
プレッシャー
ろっ重圧に飲み込まれないために声を掛ける。

『言葉の通りだ。お前が生き返られるのは地獄の世界、人類が自分の命をチップにして生き残りを賭けている世界だ』

「生き残りを賭けた……世界」

説明しよう、と言ってから神様がその世界の映像を見せながら話します。

そこはマブラヴオルタネイティヴというあるゲームの世界、謎の敵「BETA」という存在によって人類は未曾有の危機に立たされているという世界らしい。

ちなみにメーカーは日本で、数多くの人達に名作として認知されているとのこと（神様談）

……帰って来た時もそうだったけど日本は随分と変わってたな、時代に置き去りにされた気分だった。

「……………」

『生き返られるのだとすればその世界しかない』

と、神様が最後に一言付け加えた。

「……………神様、俺がその世界に行けば救える命も救えるかな？」

『……………それはお前の頑張り次第だ』

……………。

しばしの静寂のあと、意を決した俺は口を開いた。

「……………なら俺、その世界に行くよ。俺の手で1人でも多く命を救えるのなら」

『……………フォッフォッフォ！お主の覚悟、しかと見せてもらったぞ。それとスマンかったのお、息苦しかったじゃろ』

途端、神様は破顔になって謝ってくる。

「もしかして……………試されてました？」

今更ながらに気づいた俺だった。

『うむ！しかし……試したりしてほんっとにすんませんでしたあああああっ！』

後ろにジャンプしてズザザザ！という感じの音と一緒に土下座する神様。

……なんだろう、さっきから神様の印象とか威厳とかが一気に急降下してるような気がする。

『おふざけはここまでじゃ。一つ聞くが、お主はどうやってあの怪物共と戦う？』

「拳で」

『即答じゃの！？』

……でも言われてみれば確かにそうだ、殴って倒せそうなのはせいぜい『兵士級』か『闘士級』ぐらいだろうか？流石に人間サイズ以上の『要撃級』とか『突撃級』は無理だな……。

『それでも十分凄い気がするんじゃないか……あ』

呆れ顔になっていた神様が何かを思い出したような顔をする。

『お主、何か欲しいものはあるかの？』

「欲しいもの……ですか？」

『うむ、今どこからか生き返る人間には特典をあげて下さいという電波を受信したんじゃ。ほれ、何か無いかの?』

電波?受信?……よく分からないからいいや。

それにしても欲しいものか。

うーん……そうだ。

「神様、その欲しいものは自分の身体能力とかも変更出来たりしますか?」

『うむ?まあ可能じゃぞ』

「なら身体能力の強化と修行したいです」

『修行かの?ならばうってつけの人間がおるんじゃが……受けてみるかの?』

うってつけの人間?誰かは分からないけど神様がそこまでいう人なんだ、是非会ってみたい。

「お願いします!」

『よし、では少し待てよ。ほっ……と』

神様が腕を動かすと、どこからともなくその人は現れた。

太い眉。鋭い光を放つ大きな眼。長い白髪を三つ編みでまとめた40代ぐらいの男性が腕を組んで立っていた。

「お前が修行を受けたい童か^{わっは}」

「は、はい！」

「いい返事だ、それに武闘家としての覇気も十分……童、名は！」

「凱宗 土門です！」

「いい名だな。では土門よ！ワシは東方不敗マスター・アジア！そして流派東方不敗の教えは厳しいぞ！」

「はい！」

ここからは師匠のセリフのみで修行の風景をお送りします。

「この馬鹿弟子があゝ！」

「足を踏ん張り、腰を入れんかあつ！」

「貴様の力はその程度のものかあつ！」

「未熟！未熟！未熟千万！」

「だああからお前はアホなのだあつ！」

……結果だけ言おう。師匠との修行は命懸けだった。それと、先に神様に身体能力強化をしていなかったから大変な目に遭った。

＊ ＊ ＊

それから3年ほどの月日が流れた頃……。

「土門よ、今日をもってお前の修行は終了する」

「……………はい！」

「うむ、いい返事だ……………ならば！」

「流派！東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新！」

「系列！」

「天破侠乱！見よ！東方は赤く燃えているうつつ！」

互いの拳を合わせ、漢詩を訓読しながらの演舞。流派東方不敗の間同士の挨拶だ。

「土門よ……………」

「師匠……………？」

師匠が突き合わせた俺の拳をその大きな手で包むように握ってくる。

「土門よ、お前は地球が好きか？」

「……………はい！」

「ふ、ならば土門よ！この紋章を！キング・オブ・ハートをお前に託す！」

「師匠！？」

師匠がかざした右手の甲に紋章が浮かび上がる。俺は突然の事に理解が追いつかなかった。

「ワシは大罪人だ。人を、地球を救う資格はない」

そう言つて師匠は自分がこれまでにしてきた数々の業を語つた。俺は黙つて師匠の言葉に耳を傾ける。

「生命を尊び、愛を説く資格がお前にはある。お前は優しい人間だ、交わつてきた拳がそれを物語っている。だが土門よ！ワシがいつもお前を見守っている！紋章がいつでもお前に喝を入れてくれる！」

「し、師匠……………」

「こんなワシをまだ師匠と呼んでくれるのか？」

「自分を卑下するような事は言わないで下さい。師匠は、俺の誇れる師匠です！」

目尻が熱くなり、視界がボヤける。俺は、泣いているのか。

「土門！……………馬鹿弟子があ、男児たるもの泣くものではないぞ！」

だが師匠の目からも涙が零れている。

「し、ししょおおおおおー！」

俺は師匠に抱きついて子供のように泣きじゃくる。まるで、子供の頃に流せなかった分まで泣くように。

「……武運を祈っておるぞ」

「はい！」

こうして、俺はマブラヴの世界へと旅立った。

『……これなんて最終回？』

設定資料集（前書き）

話が進むにつれて資料が書き足されていきます。随時更新。一部ネタバレを含みます。スルーされてもかまいません。

設定資料集

名前：凱宗 かいしゅう 土門 どもん

「年齢」

物語開始時：18歳（肉体が死亡直前であるため。ただし、精神年齢は21歳）

搭乗機：シャイニングガンダム

戦闘スタイル：流派東方不敗

「詳細」

本作の主人公。マブラヴ世界においては人類最強人種であると同時に人類の常識が通用しない人種でもある。

「転生前」

幼い頃に両親を亡くし、それからは異国の地での修行に明け暮れる日々を過ごす。それから十年後、一人前の武闘家として認められ、両親へと報告と墓参のために一時日本へと帰国。その際少女を救うためにその生命を散らした。

「流派東方不敗の修行」

死んだ土門は神と出会う。そして神は土門に生き返られる提案を出す。生き返る世界は地獄そのもの。だが土門は1人でも多くの人間を救うために決意。最強の人間、東方不敗マスター・アジアの下で流派東方不敗を学ぶのだった。同時に、人間をやめるフラグを立てた。

それから3年ほどの月日が経ったのち、修行を終えた土門は師匠より最強の証『キング・オブ・ハート』を受け継ぎ、転生を果たすのだった。

「転生後」

未編集

「身体能力」

元々武闘家としての血を代々受け継いできたため、身体能力は異常に高い。なので兵士級、闘士級は徒手で倒すことができる。

それから神に身体能力の強化に加え、東方不敗マスター・アジアとの修行を経て人間をやめた。氣（神氣）も扱える。

スペックを例えるのならば

- ・弾丸を掴めます
- ・目にも止まらぬ両拳の連打ができます
- ・BETAがなんか爆発します
- ・突撃級を蹴り上げます

結論から言えば、人類の刃である戦術機とは何だったのかと思われるとしか言わざるを得ない身体能力。

もはや語るまい↑某ソロモンの悪夢風に。

「性格」

正統派の熱血漢を地で行く。悲しみを知り、他者を慈しみ、愛を知り、己が信じる正義のために拳を振りかざします。女性の扱いは苦手（幼い頃よりそうだった機会がなかったから）。

「必殺技」

・シャイニングフィンガー（生身）

“光の指”と呼ばれ、指先に神気を集中、凝縮し、放つ技。本来は神経を麻痺させて戦闘不能程度で留めるのだが、相手は人間ではないので遠慮は要らない。なので神気を極限まで高めるとBETAは「ひでぶ！」する。

・超級霸王電影弾

神気を頭部以外に纏って突撃する技。突撃の後上空で構えをとって「爆発！」と叫ぶとBETAは爆発する。今作では有効な技なのだが何故か不遇な扱いを受ける。……作者に文才がないからなのではあるが。

「メカニック」

未編集

闘之一 決意

「……………」

永い眠りから醒める。呻きながら俺は重く感じる瞼をこじ開けた。

すると視線にまず飛び込んできたのは照りつける太陽の光……ではなく、そう感じさせるほどのライトの光だった。これに俺は二度目の呻き声を小さく漏らした。

柔らかな感触、それがベッドのものだと分かると同時に起き上がって確認する周囲には特にこれといった物はなく、あるのは小型のモニターと扉だけ。とても質素だと思った。

もつとも、自然の中で育ってきたような俺にとっては別段気にすることでもないが。

プシュー！

『ドモン！ドモン！ドモン！』

閉まっていた扉が横にスライドして開かれた。そこから転がりながら入ってくる何かが俺の名前を呼んでいる。

「うわ、なんだこれ？」

『ハロ！ハロ！ハロ！』

丸くて純白、点滅しているのが目なのだろうか？それと球体上部の

左右に付けられている純白とは浮く赤いカバー2枚を羽根のように羽ばたかせ、今しがた俺の名前を呼ぶのと同じ様にそう連呼していた。

「……お前、ハ口っていうのか？」

『ヨロシク！ヨロシク！』

「そっか、よろしくハ口」

ハ口と軽く挨拶を交わす。

『コッチ！コッチ！』

すると突然、ハ口は扉を開けたかと思うと飛び跳ねながら部屋を出ていった。

「お、おいハ口（ゴッソ）でっ！」

出ていったハ口を追いかけてようとして、ちょうどタイミング良く閉まった扉に顔面をぶつけた。

『ハ口！ハ口！ハ口——』

「ま、待てよハ口……どっか行っちゃった」

扉を開けて外に出た時にはハ口はどこかに吸い込まれるように消えてしまっていた。

今俺がいる場所は天井の高い回廊になっており、隣には上と下の階

へと行くタラップが備え付けられている。

ハロにはこのタラップを降りる様な手足はなかった……まさか、どこかへ行っただんじやなくて落っこちたのか!?

『ドモン！コッチ！コッチ！』

「！……ハロ！」

手摺から身を乗り出して下を見る。そこには何事もなかったかのようにはハロが左右に転がっていた。

「よ、よかった……」

会って間もないが次の瞬間には落っこちてバラバラでしたなんて嫌すぎる。安堵した俺はガックリと頂垂れた。

『ドモン！コッチ！ハヤク！コッチ！』

ハロはそんな俺の心配も露知らず、ピョンピョンと飛び跳ね俺を急かす。

「分かった、分かった。今そっちに行く……よっ——」

手摺を飛び越えた体は重力に従って落ちていき

「——と」

ハロの前に綺麗に着地した。

『……………』

「……………ん？どうした、ハロ？」

『ナンデモナイ、ナンデモナイ』

無言で俺を見つめていたハロに聞いてみたが酷く片言になりながら答える。それからハロは二、三度左右に転がった後、転がり出したのでそれについて行く。

ハロにどこへ行くんだと訊いてみると、今居るこの階にあるブリッジだそうだ。

その間にハロから説明を受ける。今俺がいるのは神様がくれた搬送船の中で名は「ブッドキャリアー」というらしい。

キャリアー内には生活に必要なものがある程度取り揃えられているとのことなので衣食住には困らないだろう。

だがそれでも物には数限りがあるので補給用の基地も用意されており、今は一度そこに向かっていくとのこと。

それと、飛び降りた階の上は大型のデッキだそうだ。なんでもある機体を格納しているとハロは言っているのだが……乗ることはまずないと考えている。だが今は素直に移動するための足をくれたという神様の好意に甘えることにした。

『着イタ、着イタ』

程なくしてハロは回廊沿いにあるハッチの扉前で停止する。どうや

ら到着したようだ。

扉を開ける。中には椅子が一つあり、大型スクリーンと自動操縦で動いている機械に囲まれている。

とりあえず中に入って椅子に座る。ハ口も椅子の前にあつた窪みのできた机に座る（？）……専用の台座なのか？

「さてハ口、俺はブリッジに案内されたわけだけど……何をすればいい？」

『……………ワカラナイ、ワカラナイ』

ズル

俺はハ口の返答にずっとこけてしまった。

「なんだそりゃ……………」

ハ口に突っ込みを入れようとしたが出来なかった。大型スクリーンに映る映像に、言葉が出なかったからだ。

「……………」

俺はゆっくりと椅子から立ち上がり、それからハ口に背を向けたあと一言だけ言い放った。

「ハ口、すまないが一度着陸してくれないか？」

『了解、了解、了解』

* * *

俺は――。

――絶句、この言葉に尽きた。

俺はブリッジの大型スクリーンに映るこの光景を見てしまった。

目の前に広がるあまりにも凄惨な光景。以前は人が住んでいたであろうこの街も瓦礫の原と化して見る影もない。見渡す限り人類の……いや、生きる全ての生命の敵ともいえる存在によって根こそぎ破壊し尽くされた跡に思わず息を呑んだ。

ベータ
BETA | 『Beings of the Extra Terr
estrial origin which is Advers
ary of human race』の略で人類に敵対的な地球
外起源種のこと。

このBETAのせいで俺が生きていた碧く輝く地球は、とても荒んでいて濁っているに違いないと、宇宙から見えているわけではないが理解するには十分だった。

廃墟と化した建物を通り過ぎ、瓦礫の山で隠れた地面を歩く。

「……………」

大通りの角を曲がった時、俺は拳を握りしめた。行手を塞いで、戦術機の首がゴロリと横たわっていたからだ。

戦術機の顔は右半分が大きく欠けた生々しい鉄の残骸。首から下は見当たらない。と思ったが少し離れた場所に建物を押しつぶして横たわっていた。装甲が剥がれた上腕からは、何本もの太いケーブルやパイプ、金属片が人の傷口さながらにむき出しになっていた。

鉄の骸に手を合わせ、散った逝った戦士への黙祷を捧げたあと、踵を返してキャリアーへと戻った。

必ず、BETAを倒すと新たな決意を秘めて。

闘之一 決意（後書き）

ドモン（土門）、戦術機・MS完全否定
乗るのはいつになる事やら……。

闘之二 使命（前書き）

なんかイキナリちゃったいくなっ
たかな？あとどうしてこうなっ
た。

闘之二 使命

キャリアーに戻ると同時にハッチが閉まり、廃墟を後に飛び立った。目的地へはまだ遠いらしく、少なくとも一日は掛かると言っていた。操縦はハロとコンピュータに任せ、俺は仮眠をとることにした。

ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！

『ドモン！起キロ！ドモン！起キロ！』

「……………」

けたたましい警報音^{アラート}とハロの声によって目が覚める。

俺はすぐさまブリッジに向かった。

「ハロ！どうした！」

『敵！敵！B E T A！B E T A！』

「！」

ハ口の言葉に体が小刻みに震える。が、これは怯えではない、恐怖でもない。これは武者震い。状況が状況であることは理解している。だが武闘家としての血が不謹慎ながらも未知の相手との闘いに、心が奮い立っていた。

「ハ口！映像を出してくれ！」

『了解！了解！』

真つ暗だったスクリーンに光が灯る。映し出された映像には画面は収まり切らないぐらいの数のB E T Aに占拠されていた。だが『光線級』が見当たらない。

それは土門にとって幸いだった。いくら生身で闘えると言っても、生身は生身。レーザーなど喰らえばひとたまりもない。それにこのキャリアーが地上に降りなければ、空にいたまま。武闘家としての能力を十分に発揮することは出来ないだろう。

「あ……なあハ口、このキャリアーは人目にはつかないか？」

光線級と一緒に今更ながらに思い出した。これだけ大きな物体が空を飛んでいたなら軍のレーダーに引つかかるか、もしくは目のいい光線級に見つかるはず。なら何故今の今まで見つからなかったんだ？

『ダイジョブ！ダイジョブ！』

専用の台座に固定され、2枚のカバーをパタパタとさせながらそう言ったハ口がスクリーンにまた別の画像を表示する。このブドキヤリアーのスペック表のようだ。このキャリアーにはそういったものに対しての妨害装置が積み込まれているらしい。

「納得はしたけど……これはマズいな」

切り替えた画面を見ながら呟く。このBETA群は真っ直ぐ前進している。その前進しているかなり先の場所を拡大すれば、今まさに避難しているであろう人々の姿が映っていた。

数機の戦術機が避難誘導を行っているが思うように捗っていないように見える。

ハ口に戦術機の照合と通信に割り込んでもらう。戦術機の所属は大東亜連合軍で、どうやらあの住民は脱出を拒んでいるらしい。

？死ぬのなら生まれた地で？……か。

分からない事もない。だが必死に助けようとしている大東亜連合軍が、この地で死にたいという住民の我が侘で巻き添えを喰らって死ぬなんてことは生命の侮辱と同義だ。俺はそれを赦すことはできない。いや、赦さない。

マイクを通して怒鳴りつけようとも思った時だった。

『こちら日本帝国陸軍中将、彩峰 荻閣。貴官らの援護に回る。それまで持ちこたえてほしい』

壮年な男性の声が通信に（人のことは言えないが）割り込んできた。

しかし日本か……世界は違えど俺の祖国、できればコンタクトを取りたいが今はそれどころじゃない。

『お、お待ち下さい中将！中将が本部を離ればこちらの指揮に影響が出てしまいます！』

「だが、国は違えど私たちには民を守る義務と誇りがある！そして今助けを求める者がいるのだ、ここで動かなければいつ守る！」

大義は立派！と言いたところだけ……統率する頭がなくなっ
てしまったら混乱を招くのは必然。……俺はマイクのスイッチをオ
ンにした。

「彩峰中将、応答願います」

『む、別回線？君は誰だ』

「俺は凱宗 土門。大東亜連合の援護にはこちらが向かいます。中
将はそのまま本部の防衛をして下さい」

『凱宗殿、ありがたいがそれはできない。私は「甘ったれた事を言
うな！」……！？』

この彩峰萩閣という人物がどれほど避難民を救いたいかわいほど理
解できる。だがそれとこれとは話が違う。

「命令という『使命』を果たせていない奴が、生命を救えると思っ
たな！」

電話の受話器を叩きつけるように俺は中将との通信を切断した。

「ハロ！俺は出る！ハッチを開けろ！」

時間はない。BETAはすぐそこまで接近している。

S i d e 彩峰 萩閣

「ま、待て！」

私の言葉は言う前に切られてしまった。

『中将、どうしました？』

部下が通信を入れてくる。今の会話は聞かれていない？直通通信だったのか？

いやしかし、今の若い男の言葉

「命令という『使命』を果たせていない奴が、生命を救えると思うな！」

……全く持つてその通りだ。私がこのまま大東亜連合の援護に向かえば本部は混乱してしまいかねない。そうなれば最悪全滅の可能性がないとは言えない。

あの声の主のおかげで救われたな。身の危険に晒されている民のことで頭が一杯になり、冷静さを失っていた。

ならば今、私が取るべき行動は一つ。

『……中将？』

「すまない、考え事だ。我々の部隊はこのまま本部を防衛。早急にBETAを殲滅したのち、大東亜連合の援護に回る」

『『『了解！』『』『』』

だがやはり心の片隅には一抹の不安として残っている。数機の戦術機を回せないかと思つたが、それは杞憂に終わった。

『！……大東亜連合軍より入電！凱宗 土門と名乗る人物が現れ、BETAと交戦中！BETAを次々に撃破しているとのこと！』

「そうか、ならば安心して我々もこちらのBETAに集中でき……どうした？」

何故かCPの顔が暗い、というよりも青ざめているようにも見えるのだが……？

「CP？どうしたCP、応答せよ」

『ハッ！こ、こちらCP、大東亜連合より更に入電なのですが……』

「？……CP、時間が惜しい。早く伝えてくれ」

『よ、よろしいので？』

「構わん。言ってくれ」

『は、はい。では……その凱宗 土門は、現在BETAと交戦中。
なお、その凱宗 土門は……す、素手でBETAを破壊していると
ことです』

「……………は？」

私は思いがけない返答に一瞬思考が停止した。

闘之二 使命（後書き）

どうでしょうか？あの彩峰中将まで吃驚してるんですけど。

闘之三 光る指（前書き）

タイトル釣られたな！まだGは出ないぞ！
ごめんなさい、調子に乗りました（´・ω・｀）

闘之三 光る指

俺が出たらすぐに離れろと八口に指示をだしてキャッリアーのハッチを開けて飛び降りる。

地面に着地すると同時に駆け、最初に見たBETAに狙いを定めた。

左右に膨らんだ大きな頭部、人間と酷似した上半身、八本の足を支えにする肉塊の下半身。実に奇怪で醜悪。

現在確認されているBETAの中で最も小さい種である。対人探知能力に優れ、腕力は人間の数倍、その剥き出しになって見える歯は人間を容易に噛み砕く。

兵士級。それがこのBETAの名前だった。

鍛えた両脚の筋肉はバネとなり、土門の体は地面から宙へと弾け飛ぶ。

「たあありやああああ！」

数十メートルもあつた兵士級との距離は一気に縮まり、咆哮と共に放った蹴りは兵士級の顔面を陥没させた。

この兵士級を倒したのを皮切りに、土門とBETAの闘いの火蓋は切って落とされた。

宙から地面に着く瞬間。背後に気配を感じ、土門の五感が空気のかすかな変化に気づく。

「ふん！」

その背後の存在に向けて裏拳を決めた。

土門の裏拳を喰らったのは兵士級とはまた別のBETAだった。

闘士級。二本足で立ち、肩部から腕は無く、代わりに象の鼻のような腕があり、その腕は人間の頭を簡単に引き抜けるほどの力がある。

その闘士級は他のBETAの中でいち早く土門を見つけ、土門の頭をねじ切ってやろうと決めた。だがそれよりも先に土門の裏拳が自身の腕の付け根へと直撃。兵士級、闘士級を巻き込みながら後方へと吹き飛ばされる。

「はあああああああつ！」

すかさず土門は闘士級に距離を詰め、加速のついた掌底打で腹を貫いたかと思うと、闘士級の体は爆ぜた。

土門が闘士級にやったこと。掌底打であるといえそうではない。それは掌底打としても機能する技である。

師匠、東方不敗マスター・アジアとの修行によって内に秘めていた氣の覚醒と神の身体能力強化の恩恵により氣は神氣となり、土門をより一層強くした。

そうした事象と相まって土門は師、マスター・アジアからこの技を伝授される事となる。

土門の必殺技とも言うべきその技の名を、マスター・アジアはこう呼称していた。

その名を?????

「これがシャイニングフィンガーというのか」

シャイニングフィンガー。“光の指”と呼ばれているこの技は、五本の指先にエネルギーを集め、それを神気にまで高めて放つもの。ただし感情の赴くままに破壊まで進むこと???殺傷は禁じ手とされている。

もつとも???それが人間であつた場合の話ではあるが。

人間ならば慈悲や博愛の精神をもって土門は手を止めるだろう。だが敵はBETA。人類の…ましてや地球の敵になど一切の躊躇も情けの欠片などありはしない。

故に、惜しみなく土門が指先に込めた神気にその体は耐え切れなくなり、爆発させるまでに至らせたのだった。

「さあ、どんどんかかってこい！」

土門は物足りない、と言わんばかりにBETAに言い放った。
?

あれから何分、何時間、何日と経ったのかと錯覚するほどのこの時に、一匹、また一匹と減らしていく中で減ったような気配を見せないので同時に。土門の中では奇妙な不快感が漂っていた。

その不快感の正体は分かる。いや、分かっていた。

こいつらからは俺に対する『敵意』がみられない。『意志』はなく、プログラム通りに動く機械だということ。それはつまり、今まで奪ってきた生命に対して何の『感情』も湧かないという事だ。

握り締める拳に更に力が籠る。

こんな奴らに自分の心が奮い立ったのかと思うと足先から頭のとつぺんまで、湧き出す怒りと自身の愚かさに満たされた。

「はあ！」

また一体、片付けた……かに見えた。今しがた、倒したはずの兵士級の腕が伸びてくる。

理由は一つ。土門の集中していた精神が乱れたからだ。

BETAへの恐怖を克服その強靱な精神力が土門の感覚を研ぎ澄ませ、弱点を見抜き、そこを突き、BETAを一撃必殺で倒していた。

だが沸々と心の奥底から湧き上がる黒い感情が土門の瞳を曇らせた

のだった。

避ける！その判断を脳が下すよりも先に本能が神経を支配し、突き動かし、体をひねらせた。

シュバツ

兵士級の腕が空を切る音と共に土門の前髪を掠めた。

土門は一度後ろへと跳躍、着地する。

タラ

「む……………」

土門の額から一筋の血が流れる。

傷は浅い、どうやら表皮が削れただけのようだ。

だがこれによって頭を冷やしたと言っていいのだろう、土門は平常心を取り戻した。

「（今の攻撃で俺は間違いなく死んでいた……まだまだ修行不足だな）」

自嘲気味にそう思った土門は流れ続ける血を止めようと懐に入れていた包帯で止血しようとしたがやめた。

土門は二度と同じ過ちをしないために、この事を戒めとした。

BETAは距離を置いた土門に対して容赦なく迫る。

今度は兵士級、闘士級の中に少しサイズの大きいBETAが混じっている。戦車級だ。

「アレをやるか」

一気に片付ける。

土門は両腕を脇に引き、軽く両足を開け、息を吸い、吐き、自然に溢れるエネルギーを体内に取り込み、吸収。そのエネルギーを神気にまで高めて全身に行き渡らせる。

「いくぞ！超級！霸王！電影？？？？！？」

神気はエネルギーの塊となって土門の頭部を残して渦となる。そして突撃しようとしたまさしくその時だった。

土門の後ろから何かが飛来し、目の前のBETAを赤紫色の花に変えた。

何事かと思い土門は技を止めて迫っていた兵士級を殴りながら後ろに振り向く。

そこには突撃砲を構え地面に水平に滑走する数機の戦術機が見えた。

闘之四 鎧（前書き）

感想でいただいたアドバイスを受けて大幅に修正、やっと投稿する事ができた。そして気がついたらお気に入り100件越え。マジでありがとうございます。相変わらずの作者クオリティですがそこんところは華麗にスルーしてやって下さい。ではどうぞ。

闘之四 鎧

Side 大東亜連合軍

「……………」

大東亜連合が現地住民の避難を行っている中で……一人の男がある異変を察知した。地震計に反応があったわけでもCPから通信が入ったわけでもない。

ただ異変を感じた、それだけだ。

だがそれは今まで戦いをくぐり抜けてきた歴戦の戦士としての“勘”が告げているのを意味していた。

「（ただでさえ現地民の避難に手間取っているのにクソつたれ、タイミング悪くやって来やがったか！）」

誰かに言っているわけでもない愚痴を内心で零しながらこの部隊の隊長を務める彼、テクス・ラウレルは操縦桿を握りしめた。

「各機！^{奴ら}BETAがやってくる！直ちに戦闘準備！」

怒声とも似つかない声を張り上げながら指示を出す。

それに伴って他の戦術機は避難作業を中断し、各機戦闘準備に入る。彼らはテクスの隊長としての能力や衛士としての腕を信賴しているため、テクスの命令に不満なく従い、即座に行動を切り替えた。

…

…

…

「オールド１よりＣＰへ！司令部との連絡はついたか！？」

隊員に指示を飛ばす最中、テクスがＣＰに入れた通信の答えを聞くために再度通信を入れる。たとえばＢＥＴＡよりも行動が迅速であったとしても、数の暴力に勝てるというわけではない。

しかも状況が状況であり、自分達の足下にいる現地住民の避難が完了していない事により迎撃が困難な今、頼みの綱は本部からの援軍だけだった。

だが、ＣＰからの返答は絶望的のしか言いようがなかった。

『こちらＣＰよりオールド１、再度援軍を要請しましたが……返答に変更はありません』

「援軍は望めないか……時間を稼ぐ、俺についてくる者以外は避難を急げ！」

『『『『了解！』『』『』』』』

テクスほか数十機の戦術機で編隊された部隊が接近するＢＥＴＡの群へと向かう。

それと……テクスが先程述べた通り、これは避難が完了するまでの

時間稼ぎでしかない。そしてBETAに近づいていく中でテクスは無事に帰還する事はできないだろうと確信していた。

これもまた、テクスの勘が告げていた。

故に、隊員には強制的に死地へと赴かせるのではなく、覚悟ある者のみを連れて行くことにした。

しかし、それはあくまでテクスの『常識』が告げる勘であり、BETAのような『非常識』な存在に対しては働いてはいない。その事をテクス含め隊員は知る事はまだない。

「あれは、人……………なのか？」

現地住民と残った部隊からなるべく離れた場所で戦闘を行うためにテクス達が向かうその際、テクスはこう呟いていた。

地平線、とまではいかないが離れた場所で蠢く無数の影……………言わず

ともがなBETAであるのだが、何故かそこで止まっているようにも見える。

疑問が晴れぬテクスは最大望遠にしてその原因を確認した。

BETAの中を縦横無尽に駆け抜ける赤い弾丸。テクスが困惑する中でも一匹、また一匹と兵士級、闘士級を次々と倒していくその正体は“人”だった。

「！？……………か、各機！突撃砲を構えていつでも発砲できるように！それと速度を上げるぞ！」

驚きを隠せないのをそのままにしてテクスは部下の返事を聞く前に速度を上げる。他の隊員も突然のことであり呆気にと取られていたが数秒遅れた後にリンクした映像を見て速度を上げた。

「やはり人だったか……………」

逃げ遅れた民間人なのか、それとも見間違いだったのか……………だが、近づけば近づくほどその姿がハッキリしてくる。

兵士級と対比してみる。おそらく人目を引くであろう長身、長髪を無雑作に後ろに束ね、仕立ての粗い革服を無頓着に着込む若い男だった。

その若さに比例して身体能力はかなり高いとみていいのだろう。でなければBETAの猛攻に自分達が到着するまでもつ筈がない。

そうテクスは自分に言い聞かせていた。

男がBETAから距離を取る。それを視認したテクスは迷わずトリガーを引いた。突撃砲から撃ちだされる劣化ウラン弾はマズルフラッシュの閃光とともにBETAに見事に着弾、同時に外部スピーカーをオンにした。

「聞こえるか！私は大東亜連合所属、テクス・ラウレル！直ちにこちらへ来てくれ！」

だがテクスの本心を言えば、素手でBETAを殺したり突然体に得体の知れない何かを纏うような怪しさ満点の奴なんか来ないで欲しいと願っていた。

Side 凱宗 土門

数十機の戦術機が押し寄せる小型のBETAを尻払ったあと俺の目の前で動きを止める。

戦術機……これが人類の刃か。これだけの大きさの機械が人の形を成して動いてるんだから不思議なものだ。前世では既にこういったロボットは存在していたのか？……まあ、今となっては分からないことだが。

と、止まった戦術機の内の一機から壮年な男性の声が発せられた。

『聞こえるか！私は大東亜連合所属、テクス・ラウレル！直ちにこちらへ来てくれ！』

立场上、民間人である俺は保護されるといったところか。それに、遅かれ早かれこの世界の“力”がどれ程のものなのか見ておく必要もあつたし丁度いい……か。

「分かりました」

一言返事を返して俺は地面を蹴り、戦術機の膝の突起物を再び蹴つて勢いをそのままにテクス・ラウレルと名乗った人物の戦術機の頭の横に飛び乗った。

『『『………』』』』

「……………？どうしました？」

言われた通りにそっち行つたんだが何故か驚かれている？

『い、いや、なんでもない。出来れば後ろまで下がって欲しいのだから……必要はないかもな』

どこか諦めたような口調でラウレルは言う。俺は何か間違った事をしたのか？

「……来るぞ！」

!!

土門の非常識な行動に呆氣に取られていた一同はBETAの接近を許してしまっていた。だが当たり前だ、BETAがテクス達を待つ理由などないのだから。

その中で一匹の突撃級が突出する。狙いはテクス。土門の言葉で我に返ったテクス達だったが反撃するには遅かった。

もっとも、それはテスク達大東亜連合部隊なのだが。

「はあああああ、だありやああああ！」

□ □ □ □
 ! ! ! !
 ? ? ? ?
 □ □ □ □

テスク達は己が目を疑った。

突撃級が浮いている、
 というか蹴り飛ばされていた。

それをするのは他でもない凱宗　土門その人である。

土門は戦術機から飛び降りてそのまま時速170キロで自走する突撃級に合わせるように疾走。

自身が突撃級と接触するその直前のタイミングに合わせて突撃級の前面装甲殻を掴み、ちゃぶ台返ししながらに突撃級をひっくり返して浮かせ、間髪入れずに腹に蹴りを入れた。

ズドオオオオオオン！！

しばし空中に停滞していた突撃級だったがそんな音と一緒に突撃級は地響きを立てながら地面に沈んだかと思うと

「爆発！」

という土門のこの謎の言葉が起爆スイッチであるかのように突撃級は木っ端微塵に吹き飛んだ。

一度ならず二度までも。

テスク達はもう何も言おうとはしなかったがこれだけは聞きたかった。

『き、君は人間なのか？』

「ああ、俺は凱宗　土門。正真正銘、人間……！？」

答える土門に突然、砂塵が襲う。

「ブッドキャリアー！？」

白い砂煙が足許まで舞い上がりながら、その砂煙を巻き上げる正体を見る。ブッドキャリアーだった。

ブッドキャリアーは土門とテスク達の頭上を通り過ぎだところで底部の噴射ノズルから青白いガスを噴出させながらゆっくりと着陸した。

『乗レ！ドモン！ドモン！乗レ！』

ハロが土門に呼びかける。

「なっ、ハロ！お前には戦線から離れていると……………」

『機体！機体！』

ハロは土門の言う事なんて聞こえない。と言うようにただ『乗レ、ドモン、機体』のこの三つの単語を連呼し続けていた。

「ハロ……ただの武闘家である俺に戦術機を操る事は出来やしないんだ」

いやいやいや、お前ただの武闘家じゃねえだろ、という感じに集音センサーが拾った土門の言葉に対して器用に手を振る戦術機達。臨機応変な対応は今置いておく。

その時だった。突然、手の甲が熱くなるのを感じた土門は、見れば紋章が輝きだしていたのだ。

「土門よ！」

「師、師匠……!？」

土門の脳裏に師匠こと東方不敗の顔が掠める。

「土門よ。何を迷うことを、何を恐れている？」

「お、お言葉ですが師匠、自分は迷っても恐れてもいません！」

「ならば早う乗って見せんかこの馬鹿弟子があゝ！」

東方不敗の問いに片膝をつけて答える土門を、東方不敗は容赦なく一蹴した。

「貴様も武闘家であるのなら！たかがモビルファイターの一機や二機、乗りこなしてみせい！」

「も、モビルファイターとは……もしや」

「左様、“アレ”ならばお前でも操れるはずだ」

モビルファイターという言葉に土門は思い当たる節があつた。そう、土門がこの世界にやって来る前に東方不敗が語った話の中で……ならば合点がいく。あれは土門にピッタリの機体なのだから。

「……分かりました、師匠！」

そこで東方不敗は笑みを浮かべたまま消えて、土門の意識は現実に戻された。

『ドモン！乗レ！ドモン！乗レ！ドモン！ドモン！』

「……ハロ、ありがとう」

『気ニスンナ！気ニスンナ！』

「ふ………出るおおおおお！ガンッダアアム！！」

土門は自然と合わせた親指と中指にスナップをきかして勢いよく掌に打ち当てる。

パチイイイイイイン！

その破裂音に呼応するかのように、ブッドキャリアーの船体の数箇所に縦に亀裂が入る。ブッドキャリアーは蕾の形をしており、亀裂は蕾の頂きから底部まで走る。

そこで開花の時を迎えた花のように、蕾を形作っていた六枚の装甲壁を花卉のように開けた。

開く装甲壁の中にあるものを土門は見つめていた。

花卉の中央には確然と屹立する一機のMFの姿。圧倒的な重量感、威圧感を放つその鉄塊が見上げる土門に大迫力としてのしかかる。

そんな土門を待つ暇はない、と言わんばかりに胸部の装甲が開き、闇のような暗さのコックピット中で点滅する無数の光が土門を誘った。

今、土門に新たな世界の景色が広がるうとしている。

闘之四 鎧（後書き）

現在、以前投稿していた『M u v - L u v に魔神見参！』を書き直してまた日の目を見させたいとか思っていたり。もっとも、それはこの作品が終わってからのではあるが。というかこの作品終わるのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6149t/>

Muv-Luv ALTERNATIVE ~ 武闘家は往く ~ (永久凍結)

2011年11月14日07時50分発行